日本キリスト教会　広島長束教会だより

ミニバラ No.64

〒731-0135　広島市安佐南区長束 3-32-16

TEL/FAX
082-238-3459

2019年6月発行

リツパの愛に動かされ

「収穫の初めのころから、死者たちに雨が天から降り注ぐころまで、リツパは昼は空の鳥が死者の上にとまることを、夜は野の獣が襲うことを防いだ。」

（サムエル記下21章10節）

これは今からおよそ3000年の昔、サウル王の死後、イスラエルの王となったダビデの時代に起きたことです。イスラエルの国に3年続けて飢饉が起こりました。そこでダビデ王が神のみこころを問うと、「ギブオン人を殺害し、血を流したサウルとその家に責任がある」という答えが与えられたのです。

かつてサウル王は、ギブオン人の町を襲って、85人の祭司を初め、男も女も、子供も乳飲み子も、牛もろばも羊も剣にかけたことがありました（サムエル記上22章18-19節）。サウルの行為は神に背くものでしたが、ギブオン人は小さな、力の弱い民ですから、これに対して復讐することはもちろん、抗議の声を発することも出来ないままで来たのです。はたしてダビデがギブオン人に尋ねたところ、彼らはサウル王とその一族に、怨念と言ってもよい思いをいだいていたことが明らかになりました。「あなたたちになにをしたらよいのだろう」というダビデ王に対し、ギブオン人は「あの男（サウル）の子孫の中から七人をわたしたちに渡してください。わたしたちは…主の御前に彼らをさらし者にします。」と答えます。残酷きわまることですが、ギブオン人にとってみれば、虐殺に対して、ただ7人の死によって赦しましょうということですから、最大限譲歩したつもりだったのかもしれません。

ダビデ王はサウル王の家を守りたかったのですが、かないませんでした。とうとう王家の7人の人たちは木にかけられて、殺されてしまいました。ギブオン人を虐殺した人たちの身代わりになったのです。

この人たちの母リツパが嘆き悲しんだことは言うまでもありません。おそらく虐殺には加わっていない、愛する子供たちがなぜこんなことになったのか、そこにどういう意味があるのか、リツパにはわからなかったでしょう。それでも、母親としての愛は彼らが死んでも揺らぎません。7人が木にかけられた場所に彼女は住み始めます。遺体をそのまま放っておけば、昼間、空の鳥がやってきて、目を突いたり、肉を食べようとするでしょう。夜は野の獣が来るでしょう。リツパは、屈辱的な死をとげた7人が、動物たちによってさらに屈辱を受けることに耐えられず、せめて遺体を守ろうとしたのです。それは自分の命もかえりみずに行われたことで、彼女はこのことを半年もの間、続けたのです。

やがてリツパのしたことが広く知られるようになり、その結果、サウル王と息子ヨナタンと7人の骨がサウルの父親の墓に丁重に葬られました。リツパの行いが人々の心を動かしたのです。

さて、ここからは私の想像が入ってきます。ギブオン人が7人の処刑によって怨念をはらして喜んだのは確かです。その彼らから見ると、リツパがしていることは余計なこと、いまいましいことであったはずですが、しかし彼女を力づくで止めることも、7人の骨が丁重に葬られることも妨害しませんでした。ということは、ギブオン人もリツパの行動を見て心を打たれ、積年の恨みが氷が溶けるように溶けていったのではないでしょうか。「私たちもつらかったけど、あなたもつらかったのですね。」…こうして虐殺の加害者の一族と、虐殺の被害者の一族が互いに赦し会い、和解が達成されたのだと思うのです。

「この後、神はこの国の祈りにこたえられた」（21章14節）。それまで沈黙なさっていた神がこのありさまを見てついに怒りを解かれ、飢饉を終わらせて、イスラエルの国に平和がもたらされました。この悲惨な話は罪なきイエス・キリストの十字架の死にもつながっています。イエス様もご自分の死によって、敵対する人たちを和解させたからです。

（2019年4月28日の召天者記念礼拝説教より）

牧師　井上　豊